

平成31年度（令和元年度） 府立亀岡高等学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）実施段階

学校経営方針		昨年度の成果と課題		本年度学校経営の重点	
生徒一人一人が個性や能力を伸長させ、自立的に社会に参画し、人権尊重を基盤として、共に支え合いながら、地域社会の一員としての役割を果たすことが求められています。 このため、教育目標や教育方針に基づき、数理科学科・普通科・芸術系が、それぞれの特色や持ち味を生かしながら、切磋琢磨し、学校の活性化を図ります。 特に、次の3点を学校経営の基本方針とします。 (1) 質の高い学習指導と確かな進路実現の具現化 (2) 社会的自立を図るために必要な能力の育成 (3) 地域・保護者に信頼される学校づくり		◆昨年度の成果(○)と課題(△) ○新学習指導要領や高大接続改革を踏まえた学校改革の議論が具体化し、新学科設置、単位制導入の方向性が定まった。 ○「ジェネリックスキル」(総学)等を通じて、カリキュラム・マネジメントの視点で教育活動を充実させることができた。 ○「亀高Can-Doリスト」の活用が定着し、「社会に通じる人」育成の取組を充実させることができた。 ○数理科学科における探究活動の充実を図ることができた。 ○生徒が主役となった学校説明会など、生徒が主体的に取り組む場面を多く作ることができた。 ○大学進学実績については、昨年度よりも躍進した結果となった。 ○地域と連携した取組や社会貢献など、美術・工芸専攻の取組を充実させることができた。 ○関係法の趣旨に基づき、人権教育の質向上、相談体制の充実を図ることができた。 ○特別活動、部活動、生徒会活動の充実により、生徒の自主性の育成を図ることができた。 ○読書啓発活動を充実させることで、図書館利用が昨年度と同様の高水準となった。 ○トビタテ留学ジャパンや海外中期・短期留学への参加など、海外に目を向ける生徒が増えた。 ○コンプライアンス意識、安心・安全の意識の向上を図ることができた。 △主体的・対話的な学びに向けての組織的な授業改善にはさらなる工夫と努力が必要である。 △数理科学科で積み上げてきた探究活動等の成果を新学科への接続に活かす必要がある。 △新学科設置、単位制導入に向けた様々な準備を、組織的に進める必要がある。 △中学生への積極的な広報を展開したが、定員割れが起こるなど一部に課題を残した。 △ツイッターによる発信を頻繁に行ったが、HPの更新については課題を残した。 △部活動の環境整備については、今後も改善の余地がある。		◆本年度学校経営の重点 (1) 社会や世界と向き合い、自分の人生を切り拓く資質や能力を育成する。 (2) すべての生徒の学力の充実に努め、組織的・系統的な進路指導を行う。 (3) 主体的・対話的で深い学びの研究により授業の改善を進め、学びに向かう力・人間性を育てる。 (4) 高い規範意識をもつ集団づくりに努める。また「総合的な探究の時間」「ジェネリックスキル(総合的な学習の時間)」の実施を通して、学力のさらなる伸長と「社会に通じる人」の育成を目指す。 (5) 令和2年度の学校改編に向けた教育課程を検討し、普通科・専門学科の教育活動の在り方を考える。 (6) 部活動の活性化を図る。また部活動、特別活動を通して「身につけさせたい力」を涵養する。 (7) 本校の教育活動全般を周知して本校の教育活動への理解を深め、志願者を増加させる。 (8) 障害者差別解消法や部落差別解消推進法などの趣旨に則り、人権尊重の視点を持ってあらゆる教育活動に取り組む。 (9) いじめの防止に取り組むとともに、支援を必要とする生徒に対して学校内・外部機関等との連携により、必要な支援を組織的に行う。 (10) 学びの基盤となり、人生を豊かにする読書への積極的な姿勢を醸成する。また地域や社会に貢献する姿勢を育成する。 (11) すべての教員が高いコンプライアンス意識を持ち、協働して教育課題に取り組み、本校教育に寄せる信頼を高める。	
評価領域	重点目標	具体的方策		評価	成果と課題
組織・運営	「社会に通じる人」育成を目指す学校改革の推進と魅力ある学校づくり	1	成績処理等の円滑な実施など教職員の負担軽減に向けた業務改善に努める。	B	成績処理に関する業務を遅滞なく進めることができた。調査ごとの出欠入力業務の軽減とミス防止のため、次年度から「校務システム日々入力」の実施に向けて、現在調整中である。
		2	高大連携の取組など普通科における特色ある教育活動をさらに充実させる。	B	高大連携の取組や特別講師の授業・講演会を実施することができた。事前・事後学習の充実など、さらに改善できる余地がある。
		3	美術・工芸専攻における指導の工夫を図り、従来の取組をさらに充実させる。	B	指導を工夫したことで、生徒は授業に前向きに取り組み、大きな成長が見られた。教員間において生徒の状況や授業、放課後の取組等を共有し、協働して進める体制づくりにはまだ余地がある。
		4	数理科学科の探究活動を、普通科への波及や影響を踏まえながら深化させる。	A	数理科学科のGSⅡ発表会に普通科アカデミア理系も参加し、研究の成果を共有することができた。土曜スマート講座の一部に普通科の生徒も参加できる体制を作ることができた。
		5	ホームページ、パンフレットを充実させるなど、入学生の募集及び広報を効果的にを行い、志願者を増加させる。	C	ホームページのリニューアル、中学生向けの広報資料の充実を図ったが、探究文理科の募集状況が目標には達しなかった。また、美工パンフレット、美工つつしんを発行することができたが、ホームページ、ツイッターの更新が頻繁にはできなかった。
		6	単位制移行及び新学科設立に向けて、教育課程や選抜業務等の入念な準備を行う。	B	単位制の特長や探究文理科及び美術・工芸専攻の特色を活かした教育課程を編成することができた。十分な検討時間がとれなかったため、細かい点で再調整が必要となった。
		7	数理科学科で積み上げてきた成果や実績を新学科への接続に活かす。	B	グローバルサイエンスの取組など、これまでの数理科学科の成果を、探究文理科のカリキュラム作成に反映させることができた。
		8	スマートスクール推進事業の準備を進め、効果的なICTの活用方法を研究する。	B	主要教科全てにおいてICTを活用した授業を実施することができた。校内においてICTを用いた公開授業も実施し、各授業におけるICT活用のポイントを全教員にフィードバックすることができた。
教育課程 学習指導	確かな教科学力とジェネリックスキルの育成	9	わかる授業、力のつく授業を行い、生徒の授業満足度を高める。	B	年2回の公開授業週間(1回はICT活用)を実施し、教員間での授業研究を促進することができた。年度途中からスマートスクール事業で導入されたICT機器を利用し、授業改善に活用することができた。
		10	(1年)基本的生活習慣の確立を図り、家庭学習習慣の定着を図る。	B	学習時間調査等の活用や個別面談を通して、家庭学習習慣の確立に向けた生徒の意識を高めることができた。
		11	(2年)生徒が主体的に学ぶ環境作りに励み、学力伸長、学習時間の増加を目指す。	B	進路を意識させる様々な取組を実施することで、生徒の学習意欲を高めることができた。学習時間の確保についてはまだ課題があり、学力伸長に向けてより丁寧な指導が必要である。
		12	(3年)学習環境を整え、生徒が主体的に学ぶ仕掛け作りを行い、進路実現をサポートする。	B	進路実現に向け分掌間で連携を図りながら、生徒のサポートをすることができた。主体性を促すという面では課題が残り、取組のさらなる工夫が必要である。
		13	「ジェネリックスキル」の取組を通して、社会に通じる力を高める。	B	2年次のジェネリックスキルの立案・実施、研修旅行での巻岐高校との交流等、新しい題材を取り入れながら、取組を充実させることができた。
		14	集中読書や「honstagram」などの取組を活性化させ、読書習慣のさらなる定着を図る。	C	図書館の貸出冊数は例年並みであった。集中読書等、様々な取組を行ったが、生徒の読書習慣を定着させ読書量を増加させるまでには至らなかった。
進路指導 キャリア教育 生徒指導 人権教育	将来を見据え、志をもって進路にチャレンジする生徒の育成	15	高大連携、地域連携や卒業生の協力を得た取組など、将来像を描くためのキャリア教育を充実させる。	B	亀岡市と連携して「亀岡霧の芸術祭」に参加したり、美術系予備校講師による特別補習を実施したりすることができた。また、地域で活躍している陶芸家を招き、楽茶碗実習を実施することができた。
		16	「Can-Doリスト」を積極的に活用して、学校生活の中で社会に通じる力を高める。	C	総合的な探究の時間や様々な学校行事で「Can-Doリスト」を活用しているが、「Can-Doリスト」を充分に活かしかれておらず改善の余地がある。
		17	希望進路を実現するために組織的・計画的な進路指導を充実させる。特に国公立大学については35名以上(うち推薦10名以上)の合格を目指す。	B	計画的な進路指導を実施することができ、進路検討会においても十分な検討が実施できた。推薦入試等における小論文担当の先生方の負担軽減が実現が大きな課題である。
		18	普通科アカデミア・スタンダード、美術・工芸専攻及び数理科学科それぞれの特色を活かした希望進路の実現を図る。	A	各コース・専攻に応じた進路指導を丁寧に行うことができた。特に美術・工芸専攻では、8割程度の生徒が芸術系の進路を希望したが、丁寧にサポートすることができた。
		19	(1年)部活動への積極的参加を通して健全な心身の発達を目指す。	B	部活動参加への呼びかけを積極的に行うことで、加入率が80%を超えた。途中で退部する生徒を減らす方策については今後検討する必要がある。
		20	(2年)学年内だけでなく他分掌、教科や保護者と日常的に連携をとり、丁寧な指導を行う。	B	生徒情報の交換など日常的に連携をとり、細やかな指導を行うことができた。複数の教科や分掌に関係する連携については、幅広く連携することでより効果的な指導となる可能性があった。
		21	(2年)高校生活最大の行事である研修旅行で、生徒自身が深い学びを得ることを見据えた指導を行う。	A	研修旅行の事前の取組や現地の学校との交流を通して、生徒は様々な気づきを得ることができ、主体的に行動できるようになるなど大きな変容が見られた。
		22	(2年)3年生でのリーダーシップ発揮に向け、行事や部活動など学校行事を充実させる。	A	学校生活最大の行事である研修旅行を実りあるものにすることができ、学校生活の充実につながった。部活動においても、中心となる立場として活動することができた。
	豊かな人間性をはぐくむ教育	23	(3年)各分掌、教科、保護者と連携を密に図り、丁寧な指導を行う。	B	生徒個々の指導において、関係分掌、関係教科、保護者との連携を綿密に図りながら指導することができた。迅速な対応という点では、改善の余地がある。
		24	(3年)最高学年として部活動や行事等で1・2年生を牽引できるリーダー性を養い、学校生活の充実を図る。	A	最高学年の自覚を高める取組により、部活動や学校行事でリーダーシップを発揮することができた。入学当初は消極的な生徒が多い学年であったが、この3年間で大きな成長が見られた。
		25	(3年)他を思いやる心の育成を図り、何事にも協力して取り組むことができる学年作りを目指す。	B	学年集会や学年行事の機会を活用し、学年としての「良い集団づくり」を繰り返し呼び掛け指導した。学校行事等の取組等の様子から、一定の成果が見られた。
		26	規範意識を涵養し、基本的生活習慣の確立、帰属意識の高揚を図る。	B	身だしなみ・時間厳守・挨拶励行など日常の指導を徹底することや、教員の率先垂範等により、生徒の中の規範意識の高まりや帰属意識の高揚に一定の成果が見られた。
		27	体育・スポーツ活動や芸術文化活動の活性化と学校行事及び特別活動の充実を図る。	C	体育祭、芸術鑑賞などの学校行事、生徒会活動などの特別活動において、いずれも現状を維持することで手一杯となり、充実を図るまでに至らなかった。
		28	自他の生命や人権の尊重を基盤とした正しい判断力と実践力の育成に努め、人間としての在り方・生き方を深く考えさせ、社会の一員としての自覚を促す指導の充実を図る。	B	今年度は、SNSに関する問題が例年以上に発生した。年々、SNSへの対応が多岐にわたるようになってきており、効果的な対応については今後の課題として残っている。
		29	教育相談会議、特別支援会議を充実させ、支援計画などを基に連携を密にし、包括的に援助を行う。	B	スクールカウンセラーや地域支援コーディネータと連携した対応ができた。学習やコミュニケーション等で課題がある生徒が多く在籍しているため、今後の支援や配慮の充実は大きな課題である。
		30	いじめを許さない学校体制を構築し、教職員の連携した指導を充実させる。	B	入学前後の機会から継続して「いじめを許さない」姿勢を発信し続けるとともに、いじめ調査後の声も丁寧に拾い上げ、分掌等との連携を通じて未然予防に努めた。
		31	人権学習の内容を再点検し、身近で自らの生き方に関わる問題として捉えさせる指導を行う。	B	今後「総合的な探究の時間」に組み入れることを視野に、講演中心の学習からグループワークを通じた発信型学習に切り替えることで、身近な問題としての学習機会を提供した。
		32	家庭や地域、関係機関との連携を図り、課題の把握ときめ細かな指導に努める。	C	関係諸機関との連携は丁寧に行ってきたが、長欠や原留・中退(転学)生徒への関わりを深めることについては十分とは言えなかった。
	安心・安全・健康的な環境	33	施設・設備の管理・改善を図り、健康で安全な学習環境の確保に努める。	B	校内の施設・設備・物品等について、修繕箇所や危険箇所がないか教職員から情報収集し、それらの箇所について迅速な改修対応に努めることができた。
		34	健康診断の経過観察、事後指導を充実させ、生徒の健康管理、生活習慣の改善に努める。	B	精密検査、経過観察者の指導を徹底することができた。研修旅行など行事の前には個別に聞き取り調査を行い、細やかな指導を行うことができた。
		35	清潔で学習しやすい環境を整えるため、清掃の徹底、用具の整備に努める。	B	美化委員会を中心に指導を行い、短い清掃時間でも毎日することの大切さを広く認識させるとともに、清掃の習慣付けをすることができた。
		36	美化委員会、保健委員会を充実させ、生徒が自主的に保健と美化の意識を高めるように指導する。	B	美化委員会の開催回数を増やし、自主的に活動できるような指導を行った。生徒の主体性を尊重することで、学校美化に貢献することを実感させることができた。
	グローバル人材の育成	37	異文化交流、異文化理解に関わる取組を一層推進する。	A	海外の研修旅行生を受入れ、体験授業や本校生徒との交流を行った。数理科学科2年生で、グアム研修の事前学習に新たな内容を盛り込み、現地での交流に活かすことができた。
研究指定等 府立高校特色化事業(スーパーサイエンスネットワーク京都校)、高校生伝統文化事業(伝統文化推進校)					
評価		A: 十分達成できている(目標以上の成果が得られた) B: ほぼ達成できている(ほぼ目標どおりの成果が得られた) C: 達成できているとはいえない(成果はあったが、目標に達していない) D: ほとんど達成できていない(ほとんど成果がなかった)			
学校関係者評価委員会による評価		新型コロナウイルス感染症拡大防止に係る臨時休業のため、学校関係者評価委員会を当初予定していた日程で開催することができず、一旦は延期とした。その後、開催日を模索したが、日程調整がうまくいかず3月末に中止を決定した。そのため、評価委員からの意見聴取・評価ができていない。			
次年度に向けた改善の方向性		評価がCの項目については、具体的な改善策を年度当初に検討し、速やかに改善を図っていききたい。評価がBの項目についても、特に学校改革に係る項目(単位制導入、新学科設置等)については、より良い取組ができるようPDCAサイクルを実現していききたい。評価がAの項目については、働き方改革の視点から、業務を削減・効率化しながら同様の成果が出せるような工夫を図っていききたい。			